

東大病院だより

表題：海野濤山書

No. 62



医学部教育研究棟から望む東大病院と夏雲（8月）

CONTENTS

- ◆教授就任の挨拶 泌尿器科・男性科 ……………（本間） ……2
- ◆教授就任の挨拶 胃・食道外科 ……………（瀬戸） ……3
- ◆教授就任の挨拶 精神神経科 ……………（笠井） ……4
- ◆東京大学医学図書館がリニューアルオープン ……………5
- ◆青山胤道博士像と佐藤三吉博士像の移設について ……………6
- ◆東京大学本郷構内遺跡 看護師宿舍地点発掘調査現地説明会が開催される
—発掘された縄文、古墳、江戸、明治時代前半の歴史的遺産の紹介— ……………6
- ◆東大病院から世界へ発信
—新しい病気の発見、原因の解明、診断機器・治療製剤の開発— (5)
10. 輸血部 ……………（高橋） ……7
- ◆東大病院外科系のルーツ、スクリバ先生・
生誕160周年 ……………（加我） ……8
- ◆医学歴史ミュージアムの紹介（10）
—伊東市立「木下空太郎記念館」— ……………（加我） ……10
- ◆東京大学医学部附属病院の最近50年の歴史年表（その2）
…（東京大学医学部・医学部附属病院 創立150周年記念誌編集委員会） ……12
- ◆岐阜県中津川市立落合中学校「スタインベルグベルリンピアノ」の
修復に見る文化財修復の意義について ……………13
- ◆東大病院いちよう保育園卒園式（卒園児保護者ご寄稿） ……………13
- ◆出来事（5月から7月） ……………15
- ◆東大病院の四季（夏の彩り） ……………16

教授就任の挨拶



泌尿器科・男性科
教授 本間之夫

本年4月1日より、北村唯一先生の後任として泌尿器科・男性科の科長を務めている本間之夫（ほんまゆきお）です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

まずは自己紹介をさせていただきます。昭和28年の生まれで京都府の舞鶴市で育ち、父の転勤で高校二年の春に川崎市に転居してきました。医学部時代は山岳部に所属していました。1978年（昭和53年）の卒業と同時に泌尿器科学教室に入局し、関連病院を回りつつ膀胱癌の研究を行い、米国での留学経験も経て学位を得ました。1987年に大学に戻り、外来医長として当時はほとんど無視されていた尿失禁などの排尿障害に対する診療を行い、治療効果の手応えを実感しました。2000年からは分院の科長（助教授）となり間質性膀胱炎の診療を始めました。この病気は強い頻尿と膀胱痛を呈する難治性の疾患ですが、客観的所見に乏しいため、10年前の尿失禁と同じく無視されていました。これに対して研究会を立ち上げ、2003年から赴任した日本赤十字社医療センターでは新しい手術である膀胱水圧拡張術を先進医療として申請し、診療と研究を継続して来ました。そして、この度ご縁があり大学に戻り科長を任されることになりました。

次に、泌尿器科・男性科の診療をご紹介します。当科で扱う疾患は、副腎、尿路、男性生殖器の殆ど全ての疾患、特に手術の対象となる疾患です。分院統合は手術件数が増大の一途を辿っており、1998年に373件であった手術件数は2007年には898件と2.4倍に急増しています。最近の傾向は、低侵襲手術などの新技術の手術件数が増えてきたことです。例えば腹腔鏡手術です。従来は副腎や腎臓の摘出術では

腹部を20センチ以上切開していました。当科では世界に先駆けて腹腔鏡下副腎摘出術を行うなど、開発早期よりこれに取り組み、今では副腎摘出術の91%（21/23：2007年以下同様）、腎摘出術の54%（28/52）が腹腔鏡手術です。今年度よりは、術中の高い腹圧（肺の圧迫）、高価な消耗品代、長期の習得期間などの欠点を克服するため、腹腔鏡手術の進化型である小切開手術を取り入れつつあります。他の新技術としては、前立腺肥大症の内視鏡的剥離手術、前立腺癌の小線源治療や超音波治療、女性の骨盤内臓器脱のメッシュ修復術、間質性膀胱炎の膀胱水圧拡張術などを行っております。また、腎不全外科として、腎臓内科との協力の下、シャント造設（49件）、腹膜透析用カテーテル留置（27件）、腎移植術（6件）なども当科で行っています。

手術以外の診療としては、癌の化学療法が重要な診療の一部です。しかし、その効果は必ずしも満足いくものではありません。これに対しては、近いうちに抗癌ウイルス治療を開始する予定です。癌細胞でのみ増殖するウイルスを作成して治療に応用するもので、従来の方法の限界を打ち破る可能性があります。また、人口の高齢化に伴い、排尿障害や性機能障害が重要な問題となりつつあります。患者数や、そのQOLへ与える影響という観点からは、この分野の泌尿器科診療における重要性は潜在的に非常に大きなものがあります。過活動膀胱、高齢者の排泄管理、男性更年期障害などがこれに当たります。新薬の開発やコメディカルとの協力体制を通して、より良い診療に努めています。

このように、泌尿器科は一見狭く見えますが、かなり性格の異なる臓器を外科的・内科的に多彩な手法で治療する分野です。今後とも、より適切な泌尿器科診療を提供することを通して東大病院に貢献したいと存じております。関係各位の一層のご支援・ご鞭撻をお願い申し上げます。ご挨拶とさせていただきます。

教授就任の挨拶



胃・食道外科
教授 瀬戸 泰之

このたび平成20年5月1日付けで胃・食道外科の教授を拝命いたしました。当科では胃や食道疾患の治療を行っておりますが、もっとも多い疾患は胃癌や食道癌などの悪性疾患です。手術治療が中心となりますが、胃癌に対しては化学療法（抗がん剤治療）、食道癌に対しては放射線科協力のもと、放射線化学療法も行っています。ですので、内視鏡治療をのぞくと、胃癌や食道癌に対するほとんどすべての治療法を行っている診療科であります。悪性疾患だけではなく、ヘルニアなどの良性疾患に対する外科治療も行っています。最近では、先進医療として高度肥満症例に対する手術治療にも取り組んでいます。

私は昭和59年に本学を卒業して中央鉄道病院、東大病院で初期研修を開始し、関東労災病院での研修後に旧第一外科に入局いたしました。旧第一外科では上部消化管グループに属し、「食道癌発生に及ぼす逆流性食道炎の影響に関する研究」で学位をいただきました。学位取得後は、診療を行っていく中でできた疑問を解決すべく、様々な研究を行いました。その中で、早期胃癌に対する縮小手術としての局所切除術などを行ってまいりました。また、臨床面では、国立がんセンター胃外科にチーフレジデントとして在籍した1年が今日の手術手技のバックボーンとなっています。その後、教室の臓器別再編に伴い、当時分院にあった消化管外科（旧第三外科）に移りました。2年ほど分院で勤務させていただいた後、故郷秋田の中通総合病院に赴任し、外科医の傍ら管理職に従事しておりました。再び平成15年から東京に戻り、癌研病院に勤務することになりました。ここでは、日常診療に没頭し、胃癌や食道癌の手術に明け暮れました。このたび、母校に戻ってきたわけで

ですが、これまでの経験を十二分に生かして、今後の診療を行っていきたいと考えています。

胃癌や食道癌の手術では、最初に食物を体内に受け入れる臓器の構造が一瞬にして（一生の長さと比較して）変わってしまいます。ですので、患者様の術後の食事に対する不安はつよいものがありますし、日常、患者さまからの質問で最も多い類のものでもあります。残念ながら、ある程度進行してしまった状況で発見された胃癌や食道癌の患者さまは、すでに食事がとれないなどの症状を自覚されているので、現在の症状をとるためには手術が必要であることを比較的容易に受け入れていただけます。難しいのは、症状がでる前に発見された「いわゆる」早期がんのかたがたです。医学的には癌が治る可能性のかなり大きい段階で見つけていただいたので lucky なのです（誠に失礼ですが）。ただし、治療後の食生活についてはある程度 down してしまうことは、前もってお伝えして、受け入れていただいております。中には、治療前と同じように食べることが可能と思う方もいらっしゃるかもしれませんが、食事に悩まれる方がいらっしゃるのも事実です。理想的治療は、その前後で生活の質（QOL）、当科の領域では特に食事の質、が変わらないことだと考えています。縮小手術を積極的に取り入れており、QOL が変わらない治療法の確立を目指していますが、まだまだ不十分だと感じています。現時点でできる最善は尽くさせていただくとともに、大学病院の使命として、あらたな取り組みも行っていきたいと考えています。最近、これまで以上に胃には様々な機能があることがわかって来ました。大きく切除してしまえば癌は治るからいいのだという発想から脱却していく必要があると考えています。また、当科では臨床に還元できる基礎的研究や、指導的人材の育成、次世代の医療者の教育にも力をいれています。どうぞ皆様の温かいご支援とご協力をお願いいたします。

教授就任の挨拶



精神神経科
教授 筈井 清登

このたび、平成20年6月1日付けで精神神経科教授を仰せつかりました。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

精神科は、人間の精神機能の障害に対して、生物—心理—社会の側面から多面的にアセスメントし、看護師・臨床心理士・精神保健福祉士などの多職種チームで治療にあたる分野です。1人の患者を生物—心理—社会の面から統合的に把握し、QOL や自己効力感の向上を最終目標としています。精神科は、「生活の総体」(宮内勝)としての人間を対象としている、医学の本質に気づかされる科です。

私どもの科は、日本で最も長い120余年の歴史を持つ精神科です。私が平成7年に研修を開始した頃の当科は、学園紛争に端を発した「外来派」「病棟派」の対立によりやく終止符が打たれたところでした。私は、自身の職歴の多くを当科に従事し、ここ1年余りは診療科長として、長い分裂状態による当科の診療・教育・研究の遅れを取り戻し、信頼を回復させることに専心してきました。これからは、当科が東大病院や精神医学の発展に貢献すべき時期であると認識しています。長期的な視野にたって、一步一步着実に進めていきたいと考えております。

診療につきましては、平成18年から開放・閉鎖60床体制を立ち上げるとともに、リエゾンチームの構築、麻酔科の協力による無けいれん ECT の導入、ケースワーカーの登用による入退院の促進・地域医療機関との連携などに努力した結果、稼働・在院日数で国立大学精神科の上位になっています。こころの発達診療部、デイホスピタル、認知症・てんかんの診療、肝移植ドナーの精神科的評価などで、小児科、リハビリテーション部、神経内科、脳神経外科、放射線科、肝胆膵外科等との連携も生まれています。

新研修制度における精神科必修化もあいまって、

医学生・研修医への精神医学教育は重要性を増しています。独立行政法人となり、教育に割くエフォートが減少せざるを得ない中、参加型の実習を強化するため、協力病院部長・医長の十余名からなる非常勤講師陣による学生教育サポート体制を確立しています。研修医教育においては、初期研修医全員が当科をローテートするようになるとともに、全国からの後期研修医の応募も増え、提供プログラムの整備を進めています。臨床心理士等のコメディカルスタッフの養成も社会的な課題となっており、多くの施設から研修生を受け入れております。全てのスタッフが教育を自己のミッションとするような雰囲気醸成を心がけたいと思います。

研究につきましては、統合失調症、心的外傷後ストレス性障害、自閉症などの脳病態解明で成果を挙げてきました。今後は臨床に還元できる研究を重視するため、統合失調症の前駆状態における早期介入研究、医療機器を薬剤選択・薬効予測の臨床検査法として確立するための臨床試験などに着手しています。わが国の精神医療は、診療報酬が労力に対し非常に低く抑えられている現状にあります。しかしこれは客観的・科学的な診断・治療法のエビデンスが不足しているといった医療者側の努力不足も要因です。医療機器による診断法の開発や、新規治療法の臨床試験によるエビデンスの蓄積を通じて先進医療・保険診療収載に役立ちたいと思います。

精神科従事者は、患者の精神・行動の障害がどんなに複雑で、対応困難とされていても、偏った感情や価値判断を排除し、生物—心理—社会的アセスメントに徹し、同時に全人格的に受け止め、多職種協同で可能な限りの対応を行うことによって、患者に自己の重要性を再認識してもらい、QOL を少しでも向上させる・・・この一連のプロセスに一貫して寄り添うプロフェSSIONナルです。また、従事者自身の人間性が、患者の治療に与える影響が大きいのもこの職種の特徴であると自戒しています。患者様に対しても、東大病院のためにも、“trustworthiness”(信頼に値する)をスローガンにして、スタッフ一同誠実に行動してまいりますので、ご支援の程何卒宜しくお願い申し上げます。

東京大学医学図書館がリニューアルオープン

医学部総合中央館（医学図書館）は、医学部創立100周年記念事業として昭和36年（1961）11月3日文化の日に開館し、奇しくも医学部・医学部附属病院創立150周年にあたる今年（2008年）耐震補強工事が完了、館内の彩りも明るい色調に整備されリニューアルされた。

医学図書館のリニューアルオープンを記念し7月14日（月）10時より、医学図書館1階玄関ホールにてオープニングセレモニーが行われた。



1. 大江図書館長の挨拶

セレモニーは、大江和彦館長の挨拶で始まり、清水孝雄医学系研究科長、三谷啓志柏図書館長による



2. 清水研究科長による開館のテープカット

スピーチ、大江館長による工事関係者の方々への謝辞および展示絵画（アトリエ・エレマン・プレゼンご協力）の紹介、職員による創設当時と改修前後の姿を紹介するプレゼンテーション「医学図書館1961&2008」と続き、手塚明医学部事務長の挨拶の後、清水研究科長により開館のテープカット（テープカットは、総合中央館竣工式（1961年）の際に使われたハサミを使用）が行われ、武谷雄二医学部附属病院長はじめ約40名の出席者が、医学図書館の新たな旅立ちを祝った。

また、館内にはダウン症の人達が優れた資質により制作した色鮮やかな絵画が展示され、館内に彩りを添えている。



3. 新装された1階第1閲覧室（ALTIUS）



4. 新装された1階第2閲覧室（PLENIUS）

青山胤道博士像と佐藤三吉博士像の移設について

青山胤道博士像（深海竹太郎 大正9年作）と佐藤三吉博士像（水谷鉄也 大正13年作）が7月、管理・研究棟の建物側の庭からバス通りに面した庭に移設された。また両博士像には、欧米の有力大学と同様、その歴史を大切かつ誇りにするため両博士を顕彰する銘版が敷設され銅像の周囲の環境も整備された。

なお、両博士に関する紹介記事は、東大病院だよりNo.49(平成17年4月25日)に「初めての日本人の若き臨床教授の誕生」として掲載されている。



青山胤通博士



移設された博士像
青山博士（左）と佐藤博士



佐藤三吉博士

1. 青山博士の写真と銘板（抜粋）1859～1917

美濃国苗木藩士の三男として江戸麻布の下屋敷に生れる。明治15年に東京大学医学部を卒業、明治16年にベルリン大学に留学し、ウィルヒョウ教授らについて内科学と病理学を学んだ。帰途、パリでシャルコー教授にも教えを受けた。明治20年に帰国後、帝国大学医科大学教授に就任、明治25年より泉橋の第二医院内科を主管した。明治26年講座制の発足により内科学第二講座教授（のちに第一講座教授）に就任した。明治27年香港のペスト流行に際し、北里柴三郎博士と共に派遣され病理解剖を担当したが、自ら感染した。医科大学学長を16年間務め、医学界に影響力を発揮した。この間、文部省に移管された伝染病研究所の所長も兼任した。明治36年第一回日本内科学会会長、明治41年癌研究会初代会頭。在任中の大正5年、胃噴門癌で没した。

2. 佐藤博士の写真と銘板（抜粋）1857～1943

大垣藩士の三男として生れる。明治4年に上京、司馬凌海の塾で学んだ。明治5年に大学南校に入学しドイツ語を学ぶ。翌年校則の変更により東校へ転校し予科生となった。明治15年に東京大学医学部を卒業、スクリバ教師のもとで助手となった。明治16年、内科の青山胤道とともにドイツへ留学、ベルリン大学ベルヒマン教授のもとで外科学を学んだ。さらにロンドンのセントトーマス病院を見学し、明治20年に帰国、同年帝国大学医科大学教授、明治26年講座制の発足により外科学第二講座教授に就任した。明治26年第二医院外科主任、明治33年第一回日本外科学会会長、明治34年附属医院院長、大正7年東京帝国大学医科大学長。昭和18年、肺炎により没した。

東京大学本郷構内遺跡 看護師宿舎地点発掘調査現地説明会が開催される

—発掘された縄文、古墳、江戸、明治時代前半の歴史的遺産の紹介—

本院看護師宿舎建築に先立ち、4月1日から埋蔵文化財調査室により建設予定地の現看護師宿舎南側空地の遺跡発掘調査が行われ、6月27日（金）、28日（土）の両日に現地説明会が開催された。発掘調査の現場では、発見された遺構・遺物の紹介以外に実際の発掘調査がどのように行われたのか真近で見ることが出来た（写真1）。

縄文時代の遺構からは、6,000年くらい前の住居2軒、7,000年くらい前の屋外炉9群、おとし穴が1基出土した。

古墳時代の遺構からは、4～5世紀の竪穴住居13軒が確認され、5世紀の集落跡の発見は文京区で初めて



1. 発掘調査の現場



2. 古墳時代前期から中期（4～5世紀）の土器

であり、重要な発見となった。また甕、壺、甑（こしき、蒸し器）、高杯（食器）、杯、器台などの土器の他、装飾具などが出土した（写真2）。

富山藩上屋敷時代（江戸時代）の遺構からは18世紀～19世紀にかけて富山藩邸の表御殿南東部に広がる庭園であった頃の植栽痕（木を植え替えた跡）、苑道、築山、冊列、大型の井戸、地下室などが出土した（写真3）。遺物は18世紀前半と幕末の製品が多く出土した（写真4）。

帝国大学時代（明治時代前半）の遺構からは、外国人教師の宿舎及び旧富山藩表御殿を利用した教場付近の庭の飛び石遺構等が出土した。



3. 富山藩上屋敷時代（江戸時代）の地下室



4. 富山藩上屋敷時代（江戸時代）の遺物

東大病院から世界へ発信

—新しい病気の発見、原因の解明、診断機器・治療剤の開発— (5)

10. 輸血部

教授 高橋孝喜

1949年(昭和24年)に院内措置として発足した輸血部は、1966年(昭和41年)に予算措置がなされ、正式に認可された。その後、1997年(平成9年)に、東京大学医学部の大学院大学発足に際して、内科学専攻輸血医学講座となった。創立当時は、中央検査部教授が輸血部長を兼任し、1984年(昭和59年)に遠山博先生が初代教授に就任された。遠山博元教授の「輸血医学」出版(現在は第3版)、大河内一雄先生によるB型肝炎ウイルス(HBs抗原)の発見、十字猛夫元教授による輸血後移植片対宿主病(Graft-versus Host Disease, GVHD)の発症機序の解明、また柴田洋一前教授による血小板抗原・抗体検査法の開発と新しい血小板型の発見など、輸血医学への貢献は非常に大きいものがある。

現在の輸血部は、医師6名(内常勤4名、非常勤2名)、臨床検査技師10名、看護師1名(材料部と兼任)、事務員1名(医事課)の構成であり、安全かつ適正な輸血療法の実践に努めている。輸血部門の基本的な業務である輸血用血液の管理・検査・供給は検査技師を中心に担っており、検査部技師の協力の下で24時間体制を実現している。通常の業務以外に、臓器や骨髄移植のためのHLA型検査(血清学的、DNAタイピング)、また免疫学的輸血副作用や移植の成績に影響する白血球(HLA、顆粒球型)抗原・抗体、血小板特異抗原・抗体検査などを実施している。輸血部医師は、輸血療法に関する各種助言・指導を行い、年6回開催の輸血療法委員会を通じて院内の輸血療法の基本方針決定及び指導を各診療科の輸血療法委員と協議の上で行っている。さらには、平成18年1月開設の「自己血外来」において、自己血輸血を予定している患者の診察、自己血貯血に関する同意書の取得、自己血採血スケジュールの決定、及び採血を行っている。また、各診療科と共同で行っている癌免疫療法のための樹状細胞の採取・培養・投与、習慣流産の免疫療法のための夫リンパ球の分離・処理・保存、さらには造血幹細胞移植のための幹細胞の採取・処理・保存を行っている。また、新たな癌治療戦略として抗血管新生療法の開発研究を行っており、内皮細胞ワクチン作製のための内皮細胞の分

離・培養・調製も行っている。

部長が全般を統率し、医師・看護師・臨床検査技師・事務員からなる職員が各科と充分連携して、多岐に渡る業務に携わり、輸血療法のレベルアップを目指している。

輸血部の業務の大要は次のとおりである。

- ①輸血用血液の管理及び供給業務(臨床検査技師による24時間体制)
 - ・受血者の各種血液型検査(ABO式、Rho(D)式、その他)、血液型の確定、登録
 - ・受血者・献血者血液間の交差適合試験
 - ・血清中の不規則抗体検査
- ②輸血副作用対策
 - ・副作用の原因解析(赤血球型、白血球型、血小板型などの不適合など)
 - ・輸血後GVHD防止のための輸血用血液の放射線照射
 - ・輸血感染症に関する遡及調査システムの確立
 - ・感染症検査(A型、B型、C型肝炎関連検査、抗HTLV-1抗体、抗HIV抗体、梅毒検査など)
- ③自己血輸血普及のための取り組み
 - ・自己血外来の設置
 - ・自己血採血、保管・管理、供給システムの確立
- ④細胞治療
 - ・患者様及び移植ドナーからの末梢血幹細胞の採取及び管理・保存
 - ・習慣流産に対する免疫療法のためのリンパ球の分離・調製
 - ・癌免疫療法のための樹状細胞の採取・培養・調整
 - ・抗血管新生療法のための内皮細胞の分離・培養・調製
- ⑤特殊検査
 - ・臓器移植、造血幹細胞移植のための組織適合性検査(HLA検査)
 - ・抗血小板特異抗体、抗顆粒球抗体のスクリーニング検査
- ⑥輸血に関する教育・指導
 - ・医学部学生(M4)に対する臨床実習
 - ・看護師、検査技師、医師に対する輸血実習
 - ・輸血療法委員会の開催(年6回)

東大病院外科系各科のルーツ、スクリバ先生・生誕160周年

ドイツでの生立ち

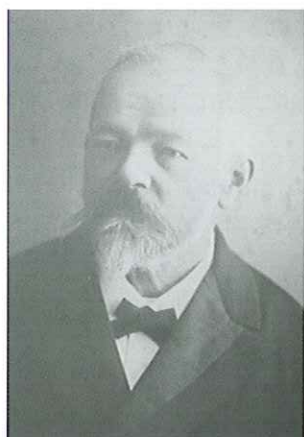


図1 Julius Carl Scriba

東大病院の外科系各科のルーツはドイツ人外科医の Julius Carl Scriba (以下スクリバ) に辿り着く (図1)。明治政府のお雇い外国人教師の一人として明治14年(1881年)に東大医学部に着任した。すでに内科のペルツは明治9年(1876年)に来日していた。スクリバは1848年に南ドイツの

ワインハイムに生まれた。1869年ハイデルベルク大学に入学し医学と植物学を学んだ。学生時代は普仏戦争に従軍し傷病兵の手当てをした。1874年「脊椎彎屈症の治療法」の学位論文で医学博士となった。次いでベルリン大学で研究し、1875年犬の胃の全摘出に取り組み成功した。その後、助手から講師に昇任した。講師の資格論文は「脂肪栓塞論」であった。

来日と東大病院での臨床

東京大学創立4年後、明治14年(1881年)33歳で来日した。外科の前任のドイツ人外科医のシュルツェが帰国してしまったために後任が求められた。3人の候補の中から選ばれ来日した。東大病院では整形外科や泌尿器を含む外科全般のほか、求めに応じて皮膚科梅毒科、眼科、法医学を教えた。スクリバの診療を受けるために、国内はもちろん国外からも東京に来た患者が多く、上海、香港、シンガポール、マニラ、ウラジオストックなどから集まったということからも彼の手術の力量がわかる。

18世紀～19世紀にかけての東大病院の手術室

石炭酸による消毒法がイギリス、熱湯消毒がオーストリアから世界に広まった頃である。スクリバは手術は器械にはとらわれず、手術時間に出血が少なくすむように短く済ませるように工夫した腕の良い外科医であった。明治18年に木造の手術室が出来、手術台は畳を利用したものであった。開腹手術の場合学生は眼鏡まで消毒し、かつ入浴して手術室に

入った。術者も同様にし、白衣を着て手術をした。手術道具は石炭酸水につけて消毒した。縫合糸はそれまでの腸線から絹糸に変えた。止血は海綿で行われた。麻酔はクロロホルムとモルヒネを併用した。内科に比し外科医の人気はその頃良くなく、スクリバは人気挽回のためには手術料をとることを強く主張し、その通りとなった。

スクリバの人柄

平素温和にして真面目な態度を終始とっていたので患者はスクリバの診療を首を長くして待っていた。大人君子の風があり、温厚で多くの人から好かれた。手術中も助手を叱ることは少なく、叱ってもすぐに気分を元に戻した。若い先生を自宅によく招待し、酒とドイツの料理でもてなしたので余計人気があった。教育の場での口癖は「諸君、決して“仕方がない”ということをはいけません。男児が仕方ないというようなことを言うとは何事ですか。」であった。手術中に使者が国务大臣の名刺を持ってきて、「すぐに会いたいと言ってます」と告げた時には怒り、「何だ、手術中に。いかに勅命であろうとも、貴重な人命を今治療しつつあるのに中断して会うなどということは到底出来ない。この最中にこのようなことを取り次ぐなどとはもっての外だ」。手術の中ではわが国で初めて腎臓摘出術を行ったことが特記される(1888年)。

スクリバは日本人の女性、神谷ヤスと結婚し3人の息子がいた。その一人ヘンリーが日本に住んだ。その子孫(須栗場氏)が日本で活躍した。スクリバの性格は活潑で豪傑風であったという。趣味は植物の採集、狩猟の他、日本の書画・骨董の収集、特に画は狩野派の画から浮世絵まで集め、日本の美術品が失われるのを心配した。酒とタバコが好きで教室員を自宅に招き酒宴の席をしばしばもうけ、楽しく過ごした。

聖路加病院での活躍と晩年

明治34年(1901年)9月、53歳で契約が満期となったため東大医学部の教師の職を辞した。「名誉教師」の称号を与えられた後、聖路加病院の外科主任に就任した。初代病院長の米国人トイスラーとは趣味の狩猟を通して親しい関係にあった(図2)。スクリバ



図2 聖路加にて
スクリバ(右から2人目)とトイスラー院長(右から3人目)



図3 スクリバと3人の息子の墓(青山墓地・外国人墓地)

Julius Karl Scriba
Doctor der Medizin
Professor der Chirurgie
Geboren Reinheim in Hessen
am 5 Juni 1848
Gestorben in Tokyo
am 3 Januar 1905
Frau Hasu Scriba
Geboren am 18.12.1864
Gestorben am 12.6.1928

の名声で多くの患者が集まり病床も増したが、肺結核のため鎌倉で転地療養した。1905年1月3日56歳でベルツに看取られながら没した。医学図書館前のベルツ・スクリバ像の除幕式は1907年に行われたので、ベルツ同様スクリバも見ることにはなかった。青山墓地の外国人墓地にスクリバの墓は3人の息子の墓とともにある(図3)。写真をこの7月に撮った時にたまたまその子孫の方がお墓の掃除をしていたのに出会った。

なおトイスラーの脳は総合博物館の6階に保存されている。

スクリバは、ベルツと違って日記は残さなかった。文章もほとんど残さなかった。スクリバ外科医局日誌が唯一残存する東大医学図書館にある資料である。当直医の日誌であるが、その中に「外科医局の名物3つ」というのがある。①ネズミの鳴き声：医局の中をチュウチュウ泣きながら騒ぐ、②破れた蚊帳：そのために蚊や蟬に悩まされる、③夜中の靴の騒音：午前3時ごろ、看護婦が起き草履の音、水の音など眠りを妨げる。

スクリバの遺品

東大総合研究博物館にスクリバの所有していた手術機器や立派な顕微鏡などが保管されている。図4に



図4 扁桃摘術の手術器具(スクリバ所有)

扁桃摘術の手術器具を示した。第1外科にはスクリバの肖像写真がある。その裏には寄付者(土肥慶蔵、木下正中ほか58名)のリストが書かれている。蔵書は日本医大の図書館にスクリバ文庫として保管されている。スクリバの息子が日本医大の英語の教師をしていた縁で寄贈されたものである。

幕末から明治末までの来日外国人医師

シーボルトからスクリバまでわが国で西洋医学を指導した医師の国籍は、オランダ17、ドイツ19、イギリス39、米国15、フランス10、ベルギー、ロシアなどその他6人であった。この他に宣教医はイギリス5、米国41人であった。このような各国から医師が来日し、わが国に近代医学をもたらした。そのほとんどは2~3年の契約で来日した短期の滞在であった。その中でも20年以上滞在し、熱心に人材の育成に貢献したベルツとスクリバは、わが国の内科と外科の恩人である。

今年の2008年はスクリバ生誕160年である。東大病院の外科系各科の初代教授のほとんどがスクリバに教わった人々である。是非記念の会を企画したいものである。

(加我 君孝)

参考文献

- ・近藤次繁、関場不二彦、田代義徳、芳賀栄次郎、西山信光：スクリバ先生。中外医事新報。1240号、pp49-76、1937
- ・宗田一、蒲原宏、長谷川洋浩、石田純郎：医学近代化と来日外国人。世界保健通信社。1988
- ・日野原重明：聖路加国際病院の百年。2002
- ・東大第1外科同窓会編：東京大学第1外科開講百年記念誌(非売品)。1993

医学歴史ミュージアムの紹介（10）

— 伊東市立「木下空太郎記念館」 —

静岡県伊東市湯川2丁目11番5号
電話：0557-36-7454

東大皮膚科の第3代教授の太田正雄（1885～1945）は臨床医学者であると同時に文学者であった。太田正雄（木下空太郎）の生まれ育った伊豆の伊東市は生家の米屋“米惣”の一部を1969年に記念館として改装し、その生涯を文学上の歩みと作品を中心に、写真や手紙、本、楽譜などが展示され、その約1/5は医学上の業績を紹介している。伊東駅より坂を下って徒歩5分、海に面したところにある。記念館は一見昔の商家のようで見過ぎて通り過ぎてしまいそうである（図1）。中に入ると受付があり100円を払う。受付はミュージアムショップを兼ねており、木下空太郎の伝記、CD、のれん、



図1



図3



図4

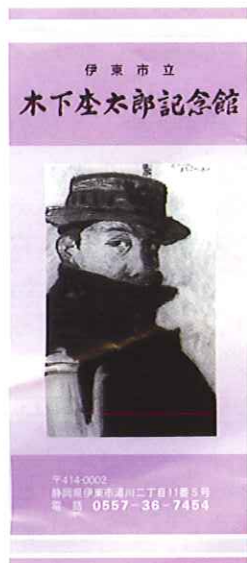


図2

絵葉書などが販売されている。本シリーズでこれまで8つの東大医学部の関連のミュージアムを紹介してきたが有料なのは初めてである（図2）。平屋の内部の展示は商家の土間を生かしている（図3）。続きの畳の部屋に上がると年表と兄弟の資料があり、ビデオで生涯を解説している（図4）。単行本が展示されている。

医学者としての歩み

独協中学を卒業した後、文学の道を進みたいと願ったが、姉の説得に折れ医学の道を進まざるを得なくなった。1906年に一高の医学へ進むコースに入学し、卒業後は東京帝国大学医学部に入学した。学生の間、北原白秋らと「パンの会」を作って文学の創作活動に熱心に取り組んだ。卒業の際には森鷗外の勧めで土肥慶蔵の皮膚科学教室に入った。1916年31歳で南満医学堂教授兼奉天病院皮膚科部長に就任。4年後帰国。その帰り道に画家の木村莊八とともに朝



庭園内蔵 大白在天
(A附石巻号 1889.3.14)

図5

鮮・中国各地の仏教遺跡を巡りスケッチをした（図5）。1922年に「癩風菌の研究」により医学博士の学位を受けた。翌年ランゲロン博士との共同研究「糸状菌分類法」を確立、1924年愛知医大教授就任、1926年41歳で東北大学教授、1937年52歳で東京帝国大学の教授となった。伝研（医科研）に太田研究室を設け癩の研究を行った。1943年3

月より胃癌で亡くなる1945年10月までの約2年間、東大病院周辺や三四郎池や伝染病研究所の草花の写生を続けた。これが後の「百花譜」の画稿となった。医学的業績は真菌の分類法を世界で初めて確立、水虫の原因が白癬であることを発見、太田母斑の発見などがある。

華麗な文学者との交流と耽美派の作品

木下空太郎記念館のほとんどが文学者との交流と彼らの作品と本人の作品の展示で占められる。童謡や詩で知られる北

木下李太郎の歌

海の入日

濱の真砂に文かけば
また波が来て消しゆきぬ
あはれはるばるわが思、
遠き岬に入日する。

図 6

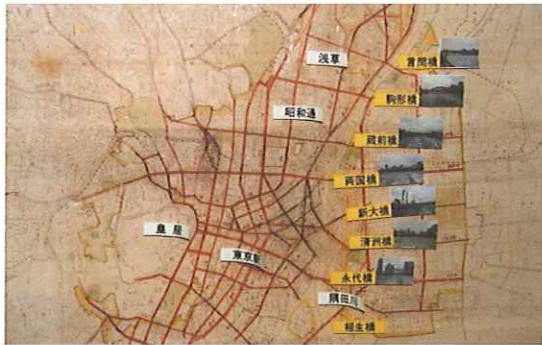


図 7

原白秋や歌人の与謝野鉄幹と晶子のような文学者との交流は深く、晶子は李太郎を詩で表現している。作曲家の山田耕作とはオペラ「南蛮寺門前」や国民歌謡「むかしの仲間」の詩の作曲を通して詩と音楽の結びつきを強くした。しかし、その作品は現代歌人の岡井隆が指摘するように「一般には現在ほとんど知る人は少なく、めったに話題にもならない。こういう人は調べ甲斐がある」。その理由は、文学史上、耽美派に属する作品は懐古的で甘美で、現代の人々の心を打たないからであろう(図6)。語学の才能があり、ドイツ語、フランス語、イタリア語、ポルトガル語に通じ、キリシタンの研究書も残している。詩、小説、日記などを含め、木下李太郎全集・全25巻が岩波書店より刊行されている。他に東大医学部出身の文学者で全集があるのは森鷗外、斎藤茂吉、安部公房にすぎない。

姉の歌人「タケ」と隅田川の橋の設計者・兄の「円三」

木下李太郎は6人兄弟の末っ子であった。姉のタケは歌人で樋口一葉と並んだ写真が展示されている。同じ写真が、東大赤門前の法真寺の一葉記念館にあるので受付の女性に聞いたところ、これは一葉記念館に差し上げた写真であるとのことであった。すぐ上の兄の円三は東京帝国大工学部土木学科出身のエンジニアで、関東大震災の後、大臣の後藤新平に帝都復興計画の責任者として抜擢され、現在も隅田川にかかる永代橋、清洲橋など6つを設計した(図7)。後に自殺し、李太郎はそれを悲しむ詩を残した。芸術的才能に富む姉、兄そして自分自身であった。

昭和18年から2年間描かれた草木や花のスケッチ「百花譜」と終戦の年の逝去

第2次大戦の末期、戦況が悪化し、昭和18年12月にはそれ



図 8



やぶへびいちご *Duchesnea indica* Focke.
大学構内
1944年(昭和19年)6月3日

図 9

まで特別扱いであった大学生も戦争に出兵する命令、すなわち学徒動員が始まった。東大医学部も例外ではなく、1年繰り上げ卒業し、陸軍が海軍へ配属される事態となった。この時代の学年はクラスの1/3が戦死している。医学部の授業も米軍の数回の東京爆撃で中止せざるを得ないことが多かった。しかし、皮膚科の太田正雄教授の授業だけはどのような状況でも断固たる決意で休むことなく続けた。「今、授業を終えてきましたよ」と得意気に話した。東大病院の防空壕の中で一緒になった学生には、「このような困難な時こそ勉強したまえ。古典を読みたまえ」と言った(図8)。この戦況悪化の中、毎日過ごした東大構内の草花のスケッチは昭和18年10月から始めた。その数は872枚にのぼる。その一部が本人が亡くなってから百花譜として名付けられ岩波書店から発行されている。医学図書館にも一部が保管されている。木下李太郎記念館で絵葉書としても販売されている(図9)。太田正雄はこの戦争をユマニテの立場から強く批判した。この草花のスケッチは希望のない戦争に対する怒りと虚無感の中であって、スケッチを描くことで逃避したのではないか。描かれた東大病院の四季の草花は65年後の今も同じく生き続けて花をつけているのであろうか。はからずも環境の変化を量る資料となった。敗戦の日、昭和20年8月15日に胃癌のため東大病院の柿本内科に入院していた。2ヶ月後の10月15日に亡くなった。お墓は多摩霊園にある。(加我 君孝)

参考

1. 李太郎会 目で見る木下李太郎の生涯. 緑星社(富士宮市) 昭和56年
2. 東大皮膚科学教室. 東大皮膚科百年の歩み. 平成3年
3. 木下李太郎画/前川誠郎編. 新編 百花譜百選. 岩波文庫 平成19年

東京大学医学部附属病院の最近50年の歴史年表

—東京大学医学部・医学部附属病院 創立150周年記念誌編集委員会—

その2：昭和43年（1968）～昭和44年（1969）

	医学部附属病院の動き	国内外の動き
昭和43年（1968）	<p>1月 医学部学生授業放棄「スト権」確立 1月29日授業放棄</p> <p>2月 上田内科医局事件発生</p> <p>3月 上田内科医局事件に関し処分発表 (学生12名・研修生5名)</p> <p>3月 医学部事務部、安田講堂総長室、一橋 学会館の評議会場へ学生ら乱入 医学図書館3階占拠</p> <p>3月 妨害により卒業式中止</p> <p>4月 一部授業妨害 医学部教官（学生委員）軟禁</p> <p>5月 臨床講堂竣工</p> <p>6月 全学共闘学生が安田講堂占拠 機動隊により占拠学生排除 総長所信表明集会 (3月11日の処分のうち学生1名の処分を発効以前の状態に戻した)</p> <p>7月 安田講堂再占拠</p> <p>8月 医学科学生108人スト終結宣言 医学部本館（2号館）占拠封鎖</p> <p>9月 全医学部集会開催（小林隆医学部長） 全学共闘会議病院外科研究棟を封鎖 病院研究棟の一部（通称赤レンガ）占拠封鎖 医学科学生45名卒業</p> <p>10月 医学部1号館、3号館占拠封鎖 内科研究棟封鎖 処分に関する再審査委員会報告書発表</p> <p>11月 3月31日発表の処分白紙撤回 加藤一郎総長代行統一代表団と交渉</p> <p>12月 臨時学生大会執行委員会結成</p>	<p>国民健康保険7割給付完全実施</p> <p>3月 医師国家試験受験拒否闘争 (大量の不出願者発生)</p> <p>4月 霞が関超高層ビル完成</p> <p>4月 小笠原諸島返還協定調印</p> <p>5月 五月革命 (バリ学生・労働者のデモストライキ) 改正医師法の公布／施行（インターン制 度廃止）</p> <p>7月 研修医制度発足 (医師免許取得後2年以上臨床研究を行 う努力義務)</p> <p>8月 ソ連・東欧軍のチェコ侵入</p> <p>10月 明治百年記念式典（東京） 川端康成：ノーベル文学賞受賞 核兵器拡散防止条約</p>
昭和44年（1969）	<p>1月 秩父宮ラグビー場において7学部集会 医学科学生大会 1/18～19 安田講堂、医学図書館、医学部1号館 3号館などに機動隊が導入され封鎖解除</p> <p>1月 医学部集会において確認書交換 「東京医学会雑誌」を「東京医学」と改称</p> <p>2月 医学部学生大会においてスト終結決議 病院外科研究棟再封鎖</p> <p>3月 医学科学生15名卒業</p> <p>4月 病院にて高圧酸素タンク爆発事故発生 死者4名</p> <p>5月 医学部長は基礎医学助手・講師の会と会見 医学部長は医学科学生執行委員と会見 臨床研究棟封鎖解除 医学部長、病院長、教務委員は医局員及び 学生と会見 赤レンガと内科研究棟再封鎖、同日解除 授業再開（全共闘約100名授業妨害）</p> <p>6月 医学部3号館封鎖解除 第一内科医局は新規入院停止 教授回診、授業再開に抗議し1ヵ月間拒否</p> <p>7月 医学部学生大会開催</p> <p>11月 鉄門旅行再開 医学部改革準備調査会発足</p>	<p>1月 大学紛争全国的に広がる</p> <p>3月 東京大学入学試験中止 各地の高等学校で卒業式混乱 超高速旅客機コンコルド試験飛行に成功</p> <p>5月 公害白書発表</p> <p>7月 アポロ11号月面着陸（人類初めて月に 立つ）</p> <p>11月 72年沖縄返還協定調印</p>

岐阜県中津川市立落合中学校「スタインベルグベルリンピアノ」の修復に見る文化財修復の意義について

東大病院だよりでは、これまでNo.55（平成18年11月30日発行）に作曲家・山田耕筰より寄贈されたドイツ製スタインベルグ社製ピアノの由来及び山田耕筰と本院の関わり等について紹介し、No.59（平成19年11月30日発行）に岐阜県中津川市立落合中学校における「幻のスタインベルグ社製ピアノ」修復について紹介した。

この度、6月22日（日）13時から落合中学校体育館において、見事に修復され蘇った落合中学校の「スタインベルグベルリンピアノ」修復記念式典及びコンサートが500名を超える入場者を集め盛大に執り行われた。



1. 見事に修復され、蘇った落合中学校の「スタインベルグベルリンピアノ」

コンサートは、落合中学校学年合唱、ハーモニー落合合唱団、ピアニスト白石英統氏によるピアノコンサート、落合ふるさと讃歌（小椋佳作詞・作曲）「こんないいところ どこにもないさ」の全体合唱が行われ、蘇った幻のピアノの音色に会場全体が感嘆し、修復を心から祝った。

20世紀前半(1908～1940)ドイツのベルリンにあったスタインベルグ社製のピアノは、製造期間も短く、現在国内で所在が確認されている同社のピアノは、グランドピアノ3台（岡山市政田小学校、京都府立綾部高等学校、長野県南佐久郡佐久穂町の八千穂福祉センター）とアップライトピアノ2台（岐阜県中津川市立落合中学校、東京大学医学部附属病院）の5台のみでチェンバロに似た響きを持つ同社のピアノは「幻のピアノ」と呼ばれ、本院のアップライトピアノを除く4台が修復を完了し、歴史的な文化遺産として大切に守られ後世に引き継がれている。

今回、落合中学校のスタインベルグベルリンピアノの修復は、「幻のピアノを再生させる会実行委員会」を同校に立ち上げて、しっかりとした「修復のコンセプト」の下に関係者が一丸となって、地域の大きな宝である幻の名器を蘇らせ、文化財修復の範を示した。本院のピアノもこれを契機として、何れ蘇らせた。



2. ピアニスト白石英統氏によるピアノコンサートの様子
蘇った幻のピアノの音色に会場全体が感嘆し、修復を心から祝った。

東大病院いちよう保育園卒園式

卒園児母 高橋 智美

去る3月21日（金）、まだ上野の桜も早く、あいにくの小雨混じりの中ではございましたが、東大病院いちよう保育園で、「第一回いちよう保育園卒園式」が、執り行われました。

卒園生がわずか三名という、小さな式でしたが、御多忙の中を、時間を割いて駆け付けて下さいました御来賓の方々と保護者の皆様のおかげで、大変に温かく心に残る、素晴らしい卒園式となりました。

御存知のとおり、東京大学では、平成15年度に、「東京大学男女共同参画基本計画」が決定し、その流れの中で、平成19年4月には、職員期待の中、保育の対象を医学部附属病院の関係者とする『東大病院いちよう保育園』（以下保育園とする）を開園されました。

私の娘を、その保育園の記念すべき、第一期生としてお預けすることが出来、この度目出たく卒園させていただきました。

保育園は、池之端門にほど近い、入院病棟の外れに、どっしりとした鉄筋コンクリート建ての建て物の中にあります。元研修講堂を改築した耐震構造であることはもちろん、防犯や安全にも配慮され、二重扉のオートロックで、ビデオカメラで常時、出入りをチェックされるので、園児も保護者も心配なく保育園を利用することが出来ました。男性保育士の常勤も、安心でございました。

娘は、医師である父親の留学に伴い、三年程外国生活を経験致しての帰国子女となり、言葉や習慣に、まだまだとまどいつつ、保育園に大変にお世話になりました。

保育園は、少人数制（現在最大保育定員32名）で、とても恵まれた体制の中で、園児は皆、大切に大事に養育していただきました。保育や躾ばかりだけではなく、就学前までの準備と教育までも配慮していただき、先生方にはとても感謝致しております。タテ割保育で、異年齢での園児同士でのかわりも多く、優しい思いやりや助け合いの心も、育ちました。

保育園では、季節や年中行事を経験させていただきました。12月のクリスマス会などは、親子参加型の

大きなイベントで、家族揃っての楽しき良き思い出となりました。

娘の年齢のクラスでは、年に三回の遠足があり、春には地域の散策に始まり、「不忍の池」へ。秋には歩き遠足で、「区内の水道資料館」へ行きました。最後のお別れ遠足では、はじめての公共交通機関を利用し「サンシャイン国際水族館」と、社会経験もさせていただきました。

保育園を取り巻く環境には恵まれ、文教地区として誇れる文京区内の児童関係施設を、惜しみなく利用出来、自然に囲まれた大学構内での外遊びでも、幼きながらも歴史や文化を感じられたことかと思えます。他にも、構内別棟へも度々おつかいへと、社会経験をさせていただきました。

保育園で思いおこされる素敵な取り組みとして、週に一回、朝、園長先生自らのピアノに合わせたリズム遊びがあります。耳で聴きながら、音に合わせて体を動かすという、五感への働き・刺激を目的に、リズムに合わせ、乳児期より、楽しく無理なく成長をうながす努力をして頂きました。

保育園の園庭には、小さく可愛い畑があり、先生方と園児達が、一年中そこで野菜作りをしております。つい先月も、収穫祭で、お料理教室もしていただき、娘はいただいた大根を、土が付きまじったまま大切に持ち帰り、喜んでおりました。

物に恵まれ過ぎる飽食のこの時代に、手作りの良さを伝えて頂きました。園内のおままごとセットをはじめ、子供の遊びイス、保護者に配られますお便りなど、そのほとんどを、先生方がお心を込められて手作りにされて、感激致しました。

さて、保育園での思い出は語り尽きませんが、最後に娘の卒園、そして新入学を迎えまして、私の子育てと、東京大学と医学部附属病院（鉄門）との深き御縁で、終わらせていただきたく思います。

末筆ながら、素晴らしい保育園を立ち上げて下さり、御苦労がありがたかったかと存じますが、関係者の方々にも、この場をお借りし深く、厚く御礼申し上げます。



出来事

平成20年5月～平成20年7月

5月9日(金)

医学部・医学部附属病院創立150周年記念式典挙行

医学部・医学部附属病院は、安政5年(1858年)に神田お玉ヶ池に開設された「種痘所」を起源とし、本年創立150周年を迎えたことから、5月9日(金)、皇太子殿下の御臨席のもと、東京大学大講堂で創立150周年記念式典が挙行された。

(詳細は、東大病院だよりNo.61号掲載ページ参照)



5月14日(水) ふれあい看護体験

5月12日看護の日(近代看護を築いたフローレンス・ナイチンゲルの誕生日)にちなみ、高校生、社会人を対象として、4名の参加者によりふれあい看護体験が実施された。

(看護部)



5月15日(木)

22世紀医療センター公開セミナーシリーズ(7)

時間: 16:30～17:00

場所: 中央診療棟2(7階大会議室)

内容: 司会 関節疾患総合研究講座 吉村典子特任准教授

講演:

22世紀医療センターにおける先進医療を目指した免疫細胞治療
免疫細胞治療学(メディネット)講座 垣見和宏特任准教授
先進医療のレギュレーション
株式会社メディネット経営企画部 白川光政専任部長

5月19日(月)

バンコク・チェラロンコン大学病院関係者、東大病院見学

バンコク・チェラロンコン大学病院外科医師他が本院の診療施設の見学を行った。



5月26日(月)

医療職のための美容講座<笑顔・姿勢・発声・身だしなみ&誰にでも役だつナチュラルメイクの基礎とコツ>

時間: 17:30～19:00

場所: 入院棟A1階レセプションルーム

講師: 一葉化粧品主宰 尾谷一葉氏(接遇向上センター)



6月11日(水) 日本人の死生観の歴史研究会

時間: 18:30～20:00

場所: 入院棟A1階レセプションルーム

内容: 死を語る理由の必然性と歴史性

講師: 帝京大学外国語学部 梶谷真司准教授(緩和ケア診療部、放射線科)

6月13日(金) ミニコンサート

時間: 16:45～17:30

場所: 外来棟1階エントランスホール

演奏: 安田知博氏(尺八)、中島伸子氏(ピアノ)

(医療サービス推進委員会)



6月16日(月)

ニュージーランド カンリフ大臣、東大病院見学

ニュージーランド カンリフ大臣一行が、本院の診療施設の見学を行った。



6月20日(金) 第17回東大研究倫理セミナー

時間: 臨床倫理指導員(CEC)連絡会

(CECまたは代理) 16:40～16:55

第Ⅰ部(更新受講者対象) 17:00～17:30

第Ⅱ部(新規受講者必修;更新受講者任意)

17:40～18:10

第Ⅲ部(新規受講者対象) 18:15～19:30

場所: 医学部鉄門記念講堂(教育研究棟14階)

司会: 赤林 朗(医学系研究科・医学部倫理委員会委員長)

荒川義弘(病院臨床試験部副部長)

臨床倫理指導員(CEC)連絡会

第Ⅰ部

更新受講者講習会

荒川義弘(病院臨床試験部副部長)

第Ⅱ部

基調講演(新規受講者は必修、更新受講者は任意)

「臨床研究に関する倫理指針:改正の概要」

佐藤大作(厚生労働省医政局研究開発振興課課長補佐)

第Ⅲ部 新規受講者講習会

1 各種指針と医学系研究科・医学部における研究倫理審査体制

赤林 朗(医学系研究科・医学部倫理委員会委員長)

2 研究倫理審査を受けるための手続き
徳永勝士(ヒトゲノム・遺伝子解析研究倫理審査委員会委員長)

3 臨床研究における個人情報管理
大江和彦(ヒトゲノム・遺伝子解析研究個人情報管理者、病院医療情報管理委員会委員長)

4 病院治験審査委員会への申請と臨床試験部の支援

長瀬隆英(病院治験審査委員会委員長)

まとめ 長瀬隆英

主催: 医学系研究科・医学部倫理委員会、ヒトゲノム・遺伝子解析研究倫理審査委員会、病院治験審査委員会、病院臨床試験部、病院企画情報運営部、病院総合研修センター

6月20日(金)

接遇講座【フランスに学ぶ ホスピタリティについて】

時間: 17:30～20:00

場所: 入院棟A15階大会議室

講師: エッセイスト(仏訳家)

伊藤絳紗子氏

(接遇向上センター)

6月24日(火) 20年度第1回感染制御セミナー

時間: 18:00～19:30

場所: 臨床講堂

内容: 感染対策: 変わりゆくもの、変わらないもの

講師: 国立感染症研究所感染情報センター 主任研究官 森兼啓太氏

(感染対策センター)

7月1日(火) リスクマネジメント講習会

時間: 17:30～18:30

場所: 臨床講堂

演題: 麻薬の取り扱いと管理上の留意点

講師: 薬剤部 杉浦宗敏 薬劑主任

(医療安全対策センター)

7月3日(木) 七夕寄席

時間: 16:45～17:45

場所: 外来棟1階エントランスホール

出演: 柳家千寿氏(落語家)

七夕の季節を迎え、医療サービス推進委員会的主催により七夕の催し物としては、初めて外来診療棟1階玄関ホールで、落語家の柳家千寿氏のご協力を頂き「東大病院七夕寄席」が開催された。会場には、入院患者様など約500名の観客が集い、「親子酒」を題材にした表情豊かな巧みな話芸に会場から笑いが溢れ、元気の素を頂き盛会の内に終了した。

(医療サービス推進委員会)



7月10日(木)

22世紀医療センター公開セミナーシリーズ(8)

時間: 16:30～17:00

場所: 中央診療棟2(7階大会議室)

内容: 司会 免疫細胞治療学(メディネット)

講座 垣見和宏特任准教授

講演 日本心臓血管外科手術データベースの構築

心臓外科 本村 昇講師

東大病院の四季

夏の彩り

夏の暑さも峠を迎える大暑の頃、池之端門から構内に入った看護師宿舎裏の木立には、ふと夏の暑さを忘れさせる花や鳥や昆虫などの生物の息吹と夏の彩が残っている。

強い太陽の光を遮り、逆光に輝く葉と木々の枝には、夏の暑さから木陰で羽を休める野鳥の姿を見ることが出来る。また、木陰に咲いた花には、蜜を吸う一瞬の黒揚羽蝶の羽ばたきが見られ夏の暑さを忘れさせる。また、

戸外の蝉の鳴声を聞くと、暑さが増してくる。草むらの露草に目を向けて、今鳴いている蝉が抜け出したかと思われる蝉の抜け殻がしっかりと露草にしがみついている姿に新鮮な驚きを感じた。草の小陰に目を移すと、暑さを凌ぎ餌を啄ばむ雀の可愛い姿が見られた。



1. 木陰で羽を休める野鳥



2. 花に群がる黒揚羽蝶



3. 露草と蝉の抜け殻



4. 草の小陰で暑さを凌ぎ餌を啄ばむ雀

7月11日(金)～12日(土)

第6回国立大学医療連携・退院支援関連部門連絡協議会

全国の国立大学病院の退院支援・地域医療連携にたずさわる医師・看護師、医療ソーシャルワーカー(MSW)及び事務職が一堂に会し関連部門における大学間の連携を図り、業務の更なる改善、向上を図ることを目的に、東京大学大講堂でシンポジウムが開催された。
(地域医療連携部)



7月14日(月)

東京大学医学図書館がリニューアルオープン
医学図書館のリニューアルオープンを記念して、10時より医学図書館1階玄関ホールでオープニングセレモニーが行われた。
(詳細は、本紙掲載ページ参照)

7月19日(土)

東京大学医学部附属病院小児医療センター開設記念講演会



7月1日から小児医療センターが開設されたことから、中央診療棟2(7階大会議室)で18時から開設記念講演会が行われた。
(関連記事、東大病院だよりNo.61号参照)

編集協力: 加我君孝

発行 平成20年8月31日
 発行人 病院長 武谷雄二
 発行所 東京大学医学部附属病院
 〒113-8655 東京都文京区本郷7-3-1
 ☎ 3815-5411
 編集担当 パブリック・リレーションセンター
 連絡先 ☎ 03-5800-9188
 E-mail: pr@adm.h.u-tokyo.ac.jp
 印刷所 株式会社 学術社

東大病院だよりは、東大病院のホームページから見る事ができます。 <http://www.h.u-tokyo.ac.jp/outline/letter.htm>
 また東大病院だよりは、年4回発行し、外来診療棟1階ロビー、入院棟A1階ロビーのパフレットスタンドから自由にお持ちいただけるよう情報提供を進めておりますが、残部には限りのあることをご了承下さい。